慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	元禄八年板『和歌庭訓』本文の素性：『日本歌学大系』の底本を考える
Sub Title	Study of the text of Waka-teikin published in 1695
Author	佐々木, 孝浩(Sasaki, Takahiro)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2011
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.101, No.1 (2011. 12) ,p.173- 195
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	川村晃生教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01010001-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

元禄八年板『和歌庭訓』本文の素性

――『日本歌学大系』の底本を考える――

佐々木　孝浩

はじめに

佐佐木信綱編『日本歌学大系』（文明社、一九四〇～三・風間書房、一九五六～六三）（以下『大系』と略称）は、歌学書・歌論書の初の本格的な集成であり、和歌文学を始めとする日本文学研究はもとより、日本思想史・文化史・美学史といった方面にも多大な貢献をした名著ではあるが、研究の初期段階の編纂物には往々にあることとして、底本の選定や校訂の有り様などに問題が認められることもまた事実である。

その利用において度々問題を感じていた学生達の声に共感し、川村晃生氏が鈴木淳氏を語らって編者となって企画されたのが、信頼できる本文に注解を加えた『歌論歌学集成』（三弥井書店、一九九九～）（以下『集成』と略称）であった。正編十六巻に別巻四巻を加えた全二十巻が予定され、二〇一一年九月現在半数の十巻が刊行されている。『国歌大

観』に『新編国歌大観』があるのと全く同様ではないが、志は似ていると言っても許されるのではないだろうか。

稿者は第十・十一巻を部分的に担当したのだが、第十巻の『和歌庭訓』の本文を作成した際に、十分な検討が行えずに気になっていた問題がある。それは『大系』第四巻（一九五六）所収の『和歌庭訓』の本文の素性の検討であった。同作品の本文末尾には、「右以元禄板本書写以彰考館文庫本久曽神氏蔵本等校正畢、昭和十六年八月」とあり、元禄板本を底本として、七十年も前に校訂本文が作成されたことが判る。

太平洋戦争開戦直前の世情不安定な中で、地道な学術作業を行っておられたことは誠に頭の下がるばかりであり、改めて『大系』という存在に感謝の念を懐かずにはいられないものがある。刊行後に学界における通行本となったことはいうまでもないが、そうした重要な存在であるからこそ、現在の学術水準からその本文整定の有り様の検討を行う必要があるものと思われるのである。

その検討を行えなかった理由は、底本となった元禄板本を披見できなかったことにあった。『大系』解題には「元禄八年板本もある」と記されるのみであるが、『大系』の編纂に尽力され、一九六三年の第十巻・総索引と別巻では編者となった久曽神昇氏の御所蔵である由を仄聞し、その閲覧を願い出たものの、見当たらないとのお返事を頂いて、その折は諦めたのであった。

『集成』第十巻刊行後に、たまたま某古書店において、久曽神氏旧蔵の元禄八年板本に出会うことができ、やはり『大系』で校合本となったと思われる、解題に「久曽神氏蔵一本」として奥書が引用される「冷泉門人従五位下源朝臣某」書写本と共に、幸いに手元に置くことができた。後述する様にこの板本は小本の薄冊であり、これが大本などの間に挟まっていたら発見できないのも無理からぬことと、納得したことであった。

この偶然の出会いに感謝し、以下に元禄八年板本の本文を翻刻し、『大系』本文との校合を行って、その問題点を洗い出し、『集成』解題の補足としたいと考える。

一　元禄八年板本の書誌と本文系統

本文の翻刻を行う前に、その書誌について確認しておきたい。

袋綴一冊。瓶覗色布目表紙は色紙と素紙を貼り合わせただけの薄い物である。大きさは一六・〇×一一・五糎。中央素紙刷題簽（一〇・一×二・四糎）に「為世和哥庭訓」とあり（右辺上部や左辺下部に切断用の枠が残る）。見返しは共紙で、前は袋になっているが後は一枚のみ。遊紙はない。内題は「和歌庭訓　為世卿作」。刷は極めて良好で墨付一三丁。無枠の半葉九行で、印面の大きさは約一三・七×九・〇糎。各丁裏左下の綴目に漢数字のみの丁付があるようだ。誤綴が甚だしく、初丁から第九丁目まで表右下に鉛筆書きで順に１４３２６８５７９と仮丁付がある。下綴は二箇所の紙釘であったようだが、現在は穴を確認できるのみ。綴糸は後補で二本の茶色絹糸。一三丁裏に「于時元禄八乙亥年／蠟月吉旦／宮城四郎右衛門／板行」と刊記がある。

表紙は擦れたような汚れと痛みがあり、料紙に達する大きな虫穴が幾つか存している。他に伝本が確認できない稀本であるが、書肆の宮城四郎右衛門自体が大変珍しい存在で、他には元禄九年刊で植村藤右衛門と合版の『能因歌枕』小本一冊が確認できるのみである。

植村藤右衛門は伏見屋藤右衛門とも称する、三都で繁栄した伏見屋一統の祖となったと思われる大店であり、井上和雄氏『増補書物三見』（青裳堂書店、一九七八）に天和（一六八一～四）頃から幕末まで続いたことが指摘されてい

る。国文学研究資料館の日本古典籍目録データベースに拠ると、新潟大学図書館佐野文庫蔵『六百番歌合』が承応元年（一六五二）植村藤右衛門の刊記を有しているようであるが、こうした天和より前の刊記を有するものは求版本であると思われる。ともかくも玉枝軒植村藤右衛門は歌書類を始め、仏書漢籍医書等多岐に亘る分野で手広く精力的な出版活動を行っていたのであり、宮城四郎右衛門とは些か不釣り合いな組み合わせと感じられる。宮城は植村と同様京の書肆であった可能性が高いが、元禄八年頃から出版業に手を染めたものの、直ぐに廃業してしまったのであろうか。板本『能因歌枕』も残存数は多くはないが、元禄八年版『和歌庭訓』が一冊しか確認できないのも、書肆の無名さと無関係ではないのかもしれない。

『和歌庭訓』は、曾祖父定家の『詠歌大概』や『近代秀歌』には及びもつかないが、鎌倉期成立の歌論書としては少なくない伝本が伝わっており、写本だけで二十本以上が確認されている。全て江戸期の書写であり、切を含めて古筆の存在は確認されないようである。元禄八年板本と、こちらもあまり伝本の多くない明和八年（一七七一）の（京）万木伊兵衛・谷口七左右衛門刊『和哥秘傳抄』の所収本との、二種の刊本が存在しており、近世期になって広まったものと思われる。

『集成』解題に記した通り、諸本は本文の出入りにより二系統に分類することができる。内題末尾の「抄」字の有無で簡単に識別ができ、これが無い方が相対的に優良な本文を有する系統（解題同様仮に第一類とする）であり、有る方がやや劣った本文を持つ系統（同じく第二類とする）である。元禄八年版は内題に「抄」字が無いことが示す如く、解題で指摘した、第二類に認められる目移りによる写し飛ばし二箇所を有し、逆に第一類に認められる写し飛ばし箇所が存しており、第一類に属すると認定して問題ないと思われる。

猶、補足として大系の校合に用いられた久曽神氏旧蔵写本の書誌を簡略に記しておく。

袋綴一冊。苔色表紙（二四・七×一七・六糎）。左肩の布目地上部鴇色暈し一部金切箔散し題簽に「和歌庭訓」と墨書（本文別筆）。内題「和歌庭訓」。料紙は上質の楮打紙。遊紙前後各一丁。墨付九丁、半葉一〇行、和歌は五字程度下げて二行書。字面高さ約一九・〇糎。一〇丁裏に「于時嘉暦元年六月十八日染紫毫書白麻畢」との本奥書があり、四行空け三文字程度下げて、「此一帖為世卿御庭訓雖二条家秘書依為／二条冷泉一源新写之令校合書損以朱筆／加之丁尤無類之蔵本努々不可他見可秘也／　明和八年五月十四日冷泉門人従五位下源朝臣（花押）謹書」との書写奥書がある。冷泉様の書風で奥書通り朱筆が認められる。前遊紙裏中央に朱方印「□山／堂図／書記」（別印重ね捺しされ判読困難）。

二　元禄八年板本の翻刻と大系本文との校合

それでは以下に元禄八年板本の本文を翻刻し、併せて『大系』本文との校合を行いたい。凡例は以下の通りである。

・翻刻は改行や文字下げなどなるべく底本に忠実に行ったが、一部の漢字の字体は通行のものに改めた。

・上部に行数を算用数字で五行毎に示し、各丁の折目を「|」で、改丁は「‖」で示した。

・校合については、漢字の字体や濁点・返り点の有無、改行位置取りの違いは問わず、文字表記の差違のみを示した。本文の異同の箇所の右傍に「＊」記号を附し、下段に本文の当該箇所を引用して、大系本の有り様を掲示した。その際、異同の性格が判るように、下段の異同箇所の冒頭に左の様な七種の記号を付した。

「○」…校訂が適正な箇所　「◆」…大系本文の不審箇所

「▲」…強いて校訂が必要では無い箇所　「△」…漢字活用語尾の追加

「▽」…仮名遣いの訂正　「◇」…仮名に漢字を宛てたり漢字表記を改めた箇所
「☆」…大きな補入のある箇所で、補入文は末尾に掲げた
・校異で「（）」で括られている部分は、『大系』が他本によって加えたものである。

和歌庭訓　　為*世卿作

一心はあたらしきをもとむへき事
此事は古人の*をしふる所更に師の仰にたか
はす。但新しき心いかにも出来かたし。よゝの
撰集よゝの哥仙よみのこせる風情有*へから
す。されとも人のおもてのことくに目にはふた
つよこし*まにはなはひとつたてさまなり。
むかしよりかはる事なけれともしかも同*し
かほにあらす。されは哥もかくのことし。花を*
しら雲にまかへこのはを時雨にあやまつ
ことはもとよりかほのことくにかはらねとも
さすかを*のれ〳〵とある所あれは作者の
得分となるなり。あたらしきをもとむとて

▲為世卿作…二条為世
◆の…ナシ
△有…有る
▲しま…さま
○ナシ…（又）
◇かほ…顔
▽を…お

さまあしくいやしけなる事ともをもとめ
よむこと有*へからす。故九条内府の御自讃哥
に　明かたのあまのとわたる月影にうき
人さへや衣うつらむと侍るを故入道民部卿
為家は無下の傾城かなと難せられ侍けりげにも』
人に心をつくさせて恋らるゝほとの人の
手つから衣うたむ事心うく侍*へくや。いはむ
や作者後京極摂政の御息正二位内大臣ほと
の人の御傾城さるすさみやは侍るへき。但
哥の習ひさのみこそ侍れ。只*大かたの事に
てこそはあらめ。必しも作者の御傾城とし
もや申侍るへきとのかれ侍*へきにや。しかれ
とも哥は作者によりて用意のあるへき
とそ承り侍*し。御哥さまは目出度こそ侍ら」
め。近き比誰とは覚え侍らす百首の哥を人
の見せられ侍*しに擣衣のうたに
　うつを*とのしはしとたえて聞えぬは

△有…有る
△侍…侍る
◇只…唯
△侍…侍る
△侍…侍り
△侍…侍り
▽を…お

今や衣をまき返す程といふ哥の侍*しを
ある人の仰*られ侍*しは擣衣のうたは*鶯の
声琴の音にもまさりてやさしくきく
所なと侍*にいりたちて案内者気に侍る
こそ見くるしく侍れ。大方は古人もかゝる
事はしらぬにて侍らしかし。しかれとも』
見*くるしきことなれはすて*てよみ侍らぬを
めす*らしき事の残りたるとて求め出しよ
まれ侍れ*は、口*伝なきか致す所にこそ侍らめ。*
此外の事ともゝよろしからぬのみ侍*し。心
あらん人は尋ねみて心得られ侍るへき歟。又
続千載集の時めされ侍*し御百首の中に
草かりいるゝ野田のな*はしろとやらむよま
れ侍*し哥をある人の仰られしは是も*無
下に俗にち*かく侍るものかなとそ侍りし。」
けにも田舎にていかなる事そと尋ね侍*し
かは田つ*くるとてこゑ*とかやもちいるゝと

△侍…侍り
△仰…仰せ　△侍…侍り　◆は…に
△侍…侍る
◇くるし…苦し　○て…、
▽す…つ
○れ…る　◆ナシ…（道の）　☆ナシ…1
△侍…侍り
△侍…侍り
◇はなしろ…苗代
△侍…侍り　◆も…は
◇ちかく…近く
△侍…侍り
◇つくる…作る　▽ゑ…え

そ申侍*し。もしさもあらはきたなくや侍らん。
いかにも家の庭訓をも師の口伝をも聞*たら
む人はいかにもかゝる事はよも侍*らし。作者
誰ともしり侍らねはもし筋なきことも*や侍
らむ。大*かたは世の中みなはけ〳〵しくなり
てかさりたる偽りにふけりてまことにま
よふ事のみ侍るこそ今更なる事*にのみ』
にては侍らねと心*うく侍れ。あるひは遠国
にてわ*か身を立*むとて重代の家督をそし
り或は家の秘説は我こそ習ひ侍*れと申人
も侍る。あるひは門弟なとに信せられんとて
よところなき事とも申出し或は宗匠なと
はよはく*かひなき哥よみにてすこしも風
情こもり力ある哥は人のうたをもみしらす
我身もよまれすと申置*て信仰する人数を
しらす。これまめやかに深くまとへるなるへし。」
そのゆ*へはよゝの伝りたる家領等こと〳〵く

△侍…侍り
△聞…聞き
▲ナシ…（よみ）
▲ナシ…（ど）
◇かた…方
▲にのみ…ナシ
◆ナシ…（も道のため）　◇あるひは…或ひは
○ナシ…（など）　◇わが…我△立…立て
○ナシ…（伝へて）　△申…申す
▽わ…は
△置…置き
▽へ…ゑ

ゆつりあたへたひ〳〵朝家に採用せられて
勅撰を承る家督には秘してをしへ
ぬ事を庶子に授*むこと然るへしや。家領
は偽る処のなきまゝに我こそ相伝と称す
る人も見え侍らす。道はうへに見えぬ間無
窮の偽に及ふ。然れとも明密*の御代にみな
あらはれ侍*ぬるにこそ。又うたのよは*きとは
いかに心うへきにか。心ふかくよろしくす*かた』
うつくしく侍るをつよきよろしき哥とは
申*へし。万葉集の耳遠き*こと葉凡俗の心
をよめるこそよは*き哥とは思ひ給ひ侍れ。
但卑劣の風情は故人詠しもらしたれは
もとめよく幽玄の姿は及はれぬまゝによま
れ侍らねははけ物を信仰せるにこそ。
一詞は古きをしたふへき事
是又古賢のをしへ尊*師の説一同也。しかれとも
委しからぬいゆへ*まよふ人おほく侍るにや。」

△授…授け
○密…察
△侍…侍り　▽は…わ
◇すがた…姿
△申…申す　◇こと葉…詞
▽は…わ
◆尊…ナシ
▽へ…ゑ

所詮ふるくよみたれはとて万葉集なとの耳
とをき詞なとゆめ〳〵好み読へからす。三代集
のうちによろしからぬ詞ともゝ侍めり。むへなへ
へら也さかしらかくのことくの詞おほく侍るに
や。かまへてやさしく優ならむ詞をとらん
としたふへしと也とそうけ給り侍し。但
八雲御抄には詞にはよきもなしあしきもなし
只つゝけから也と侍めり。是又金言也。但つゝ
けからよからんことは申に及はす末の代』
の哥よみつゝけからなれはよくはつゝけす
してあしさまにつゝけよみてよく読りと思へ
るやうかそふるに及はすおほく侍めり。よそりな
くことうくてこまつるぎわさみあつふすま
なこやか下なとはよきほとの上手はよろ
しき哥によみなし侍りぬとも覚え侍す。
但近代はけ〳〵しき上手達の秀逸にはさため
出来侍るか。それもしんしかたくや侍るへからむ。

▽を…ほ　△読…読む
○ナシ…（も）
◇ことく…如く　◇おほく…多く
◇うけ給り…承り　△侍…侍り
◇只…唯　▲也…なり
◇こと…事　△申…申す
▲ナシ…（とて）
△読…読め
◇おほく…多く　○ナシ…（況んや）
◆うく…そへ　◆ナシ…（の）
◇ほと…程
△侍…侍ら
○ナシ…（て）
◇しんしかたく…信じ難く

高野にて大師の入定の心をよまるゝとて」
しなてるやと詠*られたる事の侍るに*や。是は
聖徳太子片岡山のうへ*人にあそはして給ふ*
けるしなてるやかた岡山にと侍る御うたを
つたへてとく法師の侍りしかしなてあるやと
申侍りしもき*かれて侍りけるにや。よも家説
にては侍らし。万葉*しうにしなてるやかたあ
すはかはと侍る哥は河をしなてあるかと
詠したるにや。お*かしく侍れ。奈良の葉の
ならはぬふることともはいかにもひ*か事の『
いてき侍るものを。凡幽玄によまむと思ひ給
ふたにも心いやしく智みしかくしてかなひ
侍らぬにいかなる詞なりともなとかうつくし
うなしたてさるへきとて思ひかゝる事返*
〳〵もきもふとくこそ侍れ。かへりて愚をし
らぬとかや申侍らん。*人のしらぬ詞を読*て
物しりたる由せむと思へる企お*ろかなるさ

△詠…詠せ　◆に…とか
▽へ…ゑ　▽ふ…う
○も…を
◇しう…集
▽お…を
◇ひか…僻
△返…返す
◆ナシ…（又）　△読…読み
◇おろか…愚

まいとをしくこそ侍れ。たゝすなほによみて
上手ならんこそよにも人にも用られ侍らむかし。
それはかなはぬまゝに人をおとさむとて
足もともしらぬ鬼のおもてしたる哥ともを
よみて只世間を損するにあらす先祖の
おしへをそむくこと道をまもらむ神のい
かてかとかめ給はさらむ。悪知識にひかれて
同し罪に沈む人よく〳〵心をめくらす
へきにや。猶〳〵日本記万葉集の詞とも
読て人もしらぬ事を知たるよしするさま
朝野にみち〳〵て自受法楽とかやしたる』
さま道の魔障不可勝計とそ。
一京極入道中納言鎌倉右大臣へをくられ侍る
一巻の中に大和哥の道は遠く求めひろく
きく道にあらすと侍る事至要也。まことに
月氏漢朝のことわさをよむへきにあらす。
広学多聞を事とすへきにもあらす。たゝ

▽を…ほ
△用…用ゐ
◇只…唯　◆ナシ…（のみ）
◇おしへ…教へ
▽沈…沈ま
◇記…紀
△読…読み　△知…知り
◆受…愛
○と…こ
▽を…お
◆ナシ…（此こと）

やまと詞にて見る物聞物に付ていひ出す
事也。されはとをく経論の文にもとめひろく
詩賦の詞を移すへきにあらす。万葉集の哥」
日本紀の詞なとをもとめ聞てよむだにも
如何とこそ承り侍れ。されは顕昭かいなおほせ
鳥の事くれ〳〵と釈したるをは京極入道
中納言は此事いはてもありなむ。金翅鳥伽
陵頻なといふ鳥もあるとはかり聞て扨こそ
あれ。いなおほせとりもさる鳥こそあらむと
て有なんかし。知たるものもいなおほせ鳥は
からす也けりともすゝめ也けりともよまぬ
うへはたゝしらすよみに読たりともなにの』
くるしみかあらむ。かやうに申せはものもしら
ぬ山寺法師は当流は何も知ぬ家そと申なる。
おかしくこそとそ仰られし。
一余情の事
上手になりぬれは余情のある也。仮令故大納言

◇やまと…大和　△聞…聞く　△付…付け
▽を…ほ　◆に…を　◇もと…求　◇ひろ…広

△聞…聞き

△聞…聞き

△知…知り

△読…読み　◇なに…何

○ナシ…（など）　△知…知ら　△申…申す
▽お…を　△仰…仰せ

☆ナシ…2

入道為氏の御哥　江上春望と申*題にて

人とはゝみすとやいはむ玉津嶋霞む入江の春の曙と侍*やう也。玉津嶋の有さまをこまかに詠*たらんよりも、彼浦の景気眼に」うかひておほくの風情こもりて聞ゆる也。大方の哥の徳はわつかに三十一字の内におほくの心をよみあらはすを徳とす。わろき哥は卅*一字の内にたに心たらすして詞あまる也。重詞なと心うきものなり。夕されは門田の稲葉*をとつれて夕されは野への秋風身にしみて真野ゝ入江のはま*風になとはみな*余情ある哥と也*。哥の面にはさしたる曲節も見えすなかめ出せは哀もふかくさひし』さもまさる哥とも也。か*ゝらねともよきうた*はよみ出したる心か頓て身にしみてけにもと*覚ゆるもあり。貫之かいもかりゆけは冬のよのとよめる哥はきけは淋しくもさむくも

△申…申す
△侍…侍る
△詠…詠じ
◇卅…三十
▽を…お
◇はま…浜　◇みな…皆
○ナシ…（も）
◆ナシ…（又）　◇うた…歌
◆ナシ…（さ）

覚ゆる也。

一題をよく心得よと申す事

清輔朝臣并*入道中納言同心也。仮令は

山霞河月かやうの題にて*山の霞をたしかに

上下の句にわかちよむへし。但山のはかすむ」

なとゝてよろしき哥いて来へからんにはは、

かるへからす。河月なそらへて可知也。暁時雨

夕落葉なとあらん題をは暁とよめるはよろし

からす。いかにもね覚よこ雲有明の鳥の音なと

めくらし詠すへし。夕の字又入相のかね雲のはた

てなと読*へし。自余准可知之。又河上月野外

雪なと上外の字よむへからす。読*むとすれは

哥よろしからす。野径山路なとはさして路

とはよまねとも行歩のやうをたにもよめは路は』

可侍也。*四季の景物はみな季にし*たかひてみゆる

なり。春は雪きえ氷とけてよのけしきうら〳〵

となりて人のさまもほこらしくみゆ。是則景

◇并…並

◆にて…は

△読…読む

△読…読ま

○ナシ…（大方）　◇したかひ…随ひ

色による也。題も又然るへし。立春若菜鶯花
款冬藤い*つれも心すこくさひしき躰*に侍らす。
夏は花おち鳥帰*て四方の木立しけ〳〵とし
て涼しきさまにはみえて更衣卯花時鳥五月雨
夕立蟬蓮納涼いつれも幽玄にはみえ侍*す。秋
は荻風萩の露といふよりいつれかさひしく」
悲しからぬ題侍らす。愁の字を以て秋の心をつ
くるにて思ひしるへし。冬は虫の音草の色かれ果
て露こほり霜結ひて冬こもりたるさま淋
しか*らすと云事なし。後鳥羽院の御時の三躰*
の哥にて心得へし。されは此時哥よみ多かりし
かとも読人わつかに十人計にや。又哥は恋雑の
哥はこひしくわりなくよみぬれはさりぬへ
き哥はいてき侍る也。旅述懐可准知之。唯四季
の哥か大事にて侍るなり。さのみくとくへから『
す。おほきにたけたかく幽玄によむへし。
一本哥の事

◇いつれ…何れ　◇躰…體
△帰…帰り
△侍…侍ら
○ナシ…（くなかし）　△云…言ふ　◇躰…體

201 いかにも本哥の文字置所をたかふへし。仮令初
の五文字をは第三句に置*へし。若*をかれすは
五文字に今二文字を加へて七文字になして
205 第二*にも第四五句にも置*かふへし。本哥の文
字一句二句に過*ては更に取*へからす。*とり*つき句
なとのなくてしかもとりぬへからん万葉集
なとの哥をは心をよくとる也。」

人とはゝみすとやいはむ玉津嶋霞む入江
の春の曙と侍るは万葉*の哥に玉津嶋よく
210 みていませあをによしならなる人のまつ*とは
はいかにといふ哥也。玉津嶋一句外*はよろしき
句侍らぬほとにかやうにとられ侍るにや。大方
及ひかたきさま也。又いたく人のしらぬ哥*取
へからす。作者よくとりたる心地なれとも人*
215 しらねは無念也。又あなかちに本哥とる事
はよろしからぬ也*。又近代の哥*とるへからす。』
冥伽*なし。大かた哥はわか国の風俗神代のこと

△置…置く　△若…若し　▽を…お
○ナシ…（句）　△置…置き
△過…過き　△取…取る　○ナシ…（又）　○りつ…るへ

◆ナシ…（歌）　◆ナシ…（集）
○つ…ち
○ナシ…の　○ナシ…の
◆いたく人の…人のいたく　◆取…（本歌に）取る
◆人…人の

◆ナシ…（事）　◆ナシ…（人の）
○伽…加

わさなれは殊に神道*の守り給ふ道なり。
和哥三首以上披講の所には住吉玉津嶋明神
影向し給ふゆ*へに披か*うの時は各席を退く
なり。道をたゝしくして偏執*あるましき
なり。邪執あるか冥伽*なき事也。よく〳〵思ひ
はからふへし。是則おろかなる意案にあらす。
*をのつから承り侍*し事を九牛か一毛しる
し付*る処也。」

于時元禄八乙亥年
臘月吉旦
宮城四郎右衛門
板行

1（これはうき人よりも姿いやしく心おとりしてこそ侍らめ。）
2（余情と申すは詞の外に多くの心のあるなり。）

○道…明
▽へ…ゑ　◇かう…講
◆ナシ…（の心）
○伽…加
▽を…お　▽侍…侍り
△付…付く
☆ナシ…3

3（于時嘉暦元年六月十八日染紫毫書白麻畢。）

三　大系本文の検討

それではこの翻刻と大系本文との校合結果を踏まえて、元禄八年板本の本文と大系本文の性格について簡単に検討してみたい。

先ず、校異欄を一見して気付かされるのは、○記号の多さであろう。これは校訂が適切な箇所であり、それが多いということは、元禄八年板本の本文は些か問題が多いということを示していることになる。同時代の作品はともかく、江戸時代既に古典であった作品の整版本の本文は、相対的に問題があるのが一般的であることは、常識と言って差し支えないであろう。近世期に流布した本文の紹介等の特別な目的が無い場合、素性の良さそうな写本があるのならば、翻刻や校合本の底本に板本を使用しない方が無難であると言える。『和歌庭訓』の場合も例外ではないのである。

○の箇所を具体的に見ていくと、「ナシ」となっていて、大系で「（　）」で他本により補われる場合が圧倒的であることが判る。これは本文に一、二文字程度の細かな脱落が多い特徴があることを示している。また例えば、七〇行目で「明密」とあるのは、校訂されているように「明察」とあるべきであるなども、版下作成段階かそれ以前であるかは不明であるものの、不注意な書写をした本文であることを窺わせるものであろう。

続いて校異欄で気になるのは、「◆」と「▲」記号の多さである。その判定については稿者の主観が交じる部分もあり、必ずしも厳密ではないことは御了解いただきたいが、これらは基本的に大系本文の問題箇所を示すものと言える。

◆の例を幾つか確認すると、三行目の「古人の」とある箇所を大系が「古人」とするのは、無くても意味上に問題はないものの、底本や校合本などには「の」が存しているのであるから、消し去る必要はない箇所である。五五行目「と心うく侍れ」の「と」の後に「(も道のため)」を補入しているのも、久曽神氏旧蔵写本（以下「写本」と略称）や彰考館文庫蔵巳一八と巳一九の二本（共に第一類本）には存在せず不審である。一二六行目の「自受法楽」を「自愛法楽」と変えるのは、明らかな誤りであり、語彙研究上も問題がある。又九四行目で「ことうくて」を「ことそへて」に改めるのも、写本や彰考館巳一九に「ことうへて」とあるのを参照したとも思われるが何に拠ったのか不審である。定家本の本文を伝える広瀬本万葉集や仙覚本などでは「コトウヘク」と訓があり、「ことうへく」との本文を有する『和歌庭訓』の伝本も多いので、万葉集の受容史を考える上でも、そう校訂したい箇所である。

また▲を付した箇所も数例を上げると、七行目「よこしま」とあるのを「よこさま」と写本に拠って改めたらしいのであるが、彰考館二本は「しま」であり、そうする伝本も少なくない。実は「さま」とするのは主として第二類に属する伝本の特徴であり、第一類本の元禄八年板本では改める必要は基本的にないのである。この他でも▲の箇所は写本のみに拠るものらしい校訂が加えられているが、同本は内題こそ「和歌庭訓」と第一類的であるものの、末尾に「于時嘉暦元年…」との第二類本が有する本奥書が存しているように、両類の混態的性格を有しており、結果として大系の本文も二類的な特徴も有するものとなっているのである。そうした校訂箇所の多くは「（　）」に入れられているので、それと判るとは言えるが、全てがそうなっている訳でもなく、板本に問題がある場合も少なくないので判別は困難である。猶、作者名を「為世卿作」から「二条為世」に改めたのは、編集方針に拠るものであり、強いて▲を付す必要のない箇所ではある。

「☆」を付した大きな補入箇所三箇所について確認すると、1は第一類本の判定基準となる欠脱であり、「（　）」に示して加えるのは問題ないと言える。2は元禄八年板本特有の欠脱であり、やはり本文に問題があることを示している。3の奥書も基本的に第二類本が有するもので、情報としては貴重であるので「（　）」で示すのが適当であろう。

以上簡略な検討ではあったが、元禄八年板本の本文は問題の多いものであり、その校訂に用いた校合本にやや特殊な性格のものがあったこと等もあり、結果として大系本文自体も精密な研究に用いるのは些か問題となる箇所もあることが確認できるのである。

おわりに

まことに粗雑で不十分な検討となってしまったが、校訂本や校本の作成においては、やはり底本に善本（できれば最善本）を用いるのが理想であることや、校訂することの難しさ、そしてやはり校訂本文の利用には注意が必要であることなどを、一応明らかにすることができたものと考えたい。

誤解しないでいただきたいのは、本稿が『日本歌学大系』やその編者諸氏を非難しているのではないということである。その編集作業と存在は偉大であり、その影響力と恩恵の大きさは疑いないことである。またここで取り上げた問題も、時代的な状況や、研究の初期段階では致し方のないことであることは言うまでもないことである。

しかし研究というものが、新たな知見を見出すと共に、従来の誤りを訂正しつつ進んでいくものである以上、こうした確認作業もさらなる研究の発展には必要不可欠であるはずである。そうした作業は先学への敬意を持って行われるべきであるし、先学の偉大さを一番に感じるのは同様な作業を行ったその訂正者なのである。そのことを理解せずに、そ

うした成果を単なる先達への批判と見なして非難することがあっては、研究の健全な進展は望めないのではないだろうか。学者もその業績も崇拝される様になっては、それはもはや宗教であり、学問ではありえないはずである。人間の行うことに完全はありえない。崇拝された当の先達は、自分の研究が基礎となり、乗り越えられて発展していくことを望んでいるはずなのである。そう考えて今後も研究を続けていきたい。

《補記》本稿は、平成二十三年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究(c)）「歌論書歌学書の伝本に関する書誌学的調査研究」による研究成果の一部である。